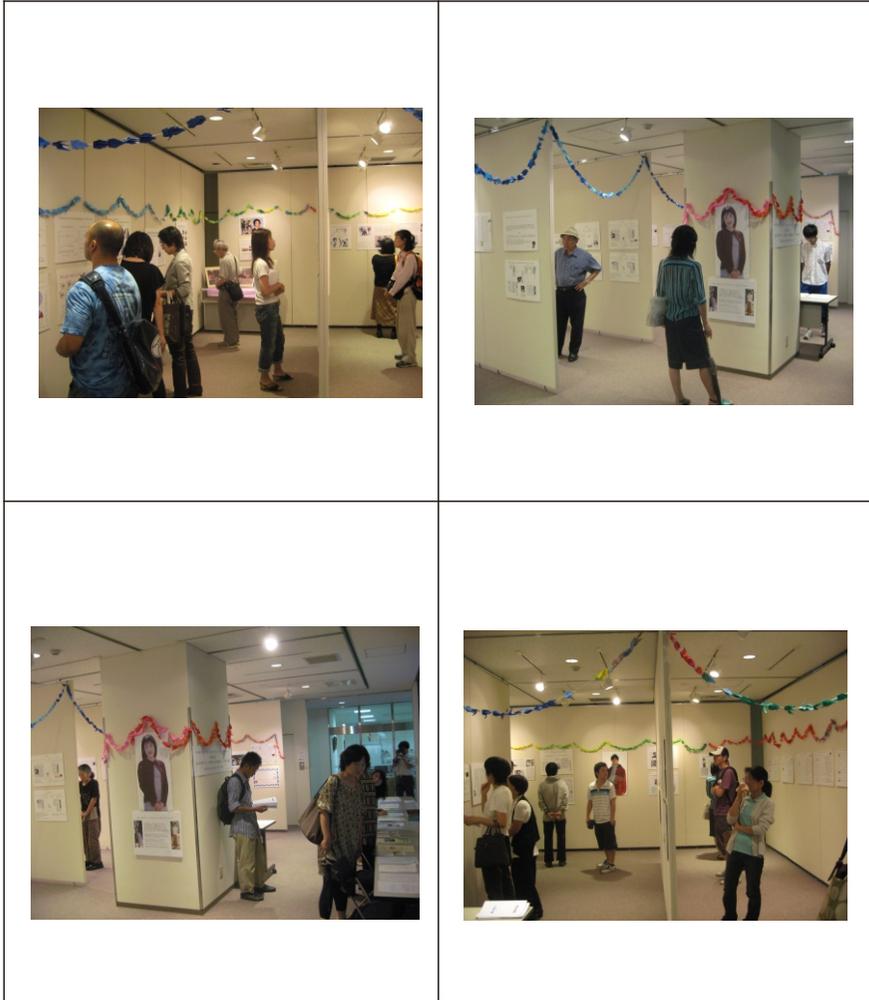


第20回パネル展「私の中で今、生きているあなた」 | N京都



全国自死遺族フォーラムから

大きくなったが、僕は博士になった。ドゥえもたに出るよん。おタイムをうけて、お父さんが死んでしまふ前に行つたらあかんてさうんや。

全国自死遺族連絡会が9月11日、京都市のひと、まち交流館で開いた第3回全国自死遺族フォーラム。東北と各地の遺族約100人が集まり、和歌山の女性50の朗読が響いた。

市役所の課長補佐だった夫は2000年3月の夜、市長や同僚、家族にあてた1通の遺書を残し、自らの命を絶つた。情報公開や条例改正などの仕事を一人で背負い、前月

働く者の命とは

<中>

には記録にあふただけで約10時間の残業を強いられ、年生だった長男が、ある知人との対話で父への思いを語った言葉だ。

「何もかも押しつけられ、相談相手もなく苦しい日々だった。市長への遺書には、そうあったという。」

「過酷な仕事で心が疲れ切つた夫をそばで分かっていたのに、子どもにもこんな思いをさせる自死は悲しすぎる。」

女性は過労自殺と家族の苦しみを明かした。関西で初めての全国フォーラムに、語る勇氣を得た。

〇〇〇〇

「私の中で今、生きているあなた」。フォーラム会場の一角では、こう銘打ったパネル展が催された。壁には、50人の男性の写真や遺書、手記などが墓碑銘のように並んだ。

パネルの中に、02年に41歳

企業社会に強く問う



で亡くなった小松弘人さん。事と人管理に悩む、雇主の姿もあった。東北大学から飛び降りた。残業は月1を卒業、浜松市の自動車会社。4時間に達していたといふ。年働いた後、異動で慣れぬ仕事。賃、過労自殺で亡くなった。

「方です」と伊藤達彦さん(66)。パネル展を企画した大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルス相談室」理事長だ。

委員長の200年ころから、組合員がうつになつての解雇や自殺が相次いだ。「大変な事態になる」と傍年、組合を母体に相談室を設け、うつ患者や労災申請の支援にも取り組んでいる。

パネル展は「働く者を自殺に追い込む社会の現実を伝えたい」と遺族に遺書を借りて始めた。和歌山の子どもの言葉も、自死遺児の詩として紹介した。仙台など全国を巡回し、京都が20回目。連絡会の遺族と縁も深まり、初めての共同開催だった。

「退職金は払わない。勝手に自殺されて、迷惑を被つた。」

裁判に勝ち、その後も労災認定を求めた過労8年半の闘いを終えたという。その訴えは企業社会全体に向けられている。

夫の死後、勤務先の社長が言い放つたせりぞき、大阪市の自動車グループ「めんくりの会」ならに参加する女性(40)は、さうしく証言した。

フォーラムでは、2年に及んだ退職金支払い請求の訴訟を振り返つた。

設計関係の会社で、夫は人事の事情から畑の建設現場に回された。仕事の悩みを口にも出さず、00年9月に突然の自死。新しい配属先に着任して2カ月後だった。

「退職金規定では、退職の1カ月前に辞表が提出されていないとね。こんなへりくつまで、会社側は持ち出した。」

「夫が命懸けで働いた分は夫に返してほしかった。自死であることが、納税であることが、京都が20回目。連絡会の事故死であることと変わらぬ。」

裁判に勝ち、その後も労災認定を求めた過労8年半の闘いを終えたという。その訴えは企業社会全体に向けられている。